

5. 九戸村との連携による総合的な探究の時間 「伊高むらおこし会社」の取組について

岩手県立伊保内高等学校長 高橋 国博

1 はじめに

「総合的な探究の時間」は、『生きる力』をはぐくむ」という理念に基づき、旧学習指導要領（平成21年3月告示）で示された「総合的な学習の時間」から始まり、内容の改定と名前を変えながら、継続して実施されている。各学校においては、カリキュラム・マネジメントを行いながら地域や学校、生徒の実態や特性を踏まえ、独自の計画を作成し、展開することとなっている。しかし、多くの学校では試行錯誤しながら進めているのではなかろうか。あるいは、協働して取り組む連携先を探したり、どのように協働するべきか関係性を模索したり、まさに適切な教育活動を展開するために学校としても探究しながら実施しているものと思う。

本稿では、伊保内高校が学校所在地の自治体である九戸村と連携して取り組んでいる「伊高むらおこし会社」の取組について、成果と課題を検証し、紹介したい。

なお、内容については、研究というより実践発表といった方がよいものとなっております。先にお詫びしておきます。

2 本校の概要

本校は岩手県北部の九戸村にある全校生徒61名の小規模校（1学年1学級）である。

昭和24年4月岩手県立福岡高等学校伊保内分校として設置され、昭和48年4月に岩手県立伊保内高等学校として独立。

一時は1学年3学級、計9学級の規模であったが、少子化に伴い、昭和59年に1学年2学級募集、平成29年に1学年1学級募集となり、現在に至る。



出展:Map-It

九戸村唯一の高等学校として村からの支援を受けながら、地域に貢献する高校生の育成を柱として教育活動を行っている。

特色のある活動として「江刺家神楽」継承、「地域こども読書会」（小学生への読み聞かせ会、令和5年文部科学大臣表彰受賞）などがある。

(1) 沿革

昭和24年（1949年）4月、岩手県立福岡高等学校定時制課程（夜間制）伊保内分校として、当時の岩手県伊保内村に設置。

昭和37年（1962年）昼間制となる。

昭和46年（1971年）全日制となる。

昭和48年（1973年）4月、岩手県立伊保内高等学校として独立。1学年3学級募集。

昭和49年（1974年）3月、定時制（4年課程）

と全日制（3年課程）の卒業式を同時に挙行。

昭和59年（1984年）1学年2学級募集。

平成29年（2017年）1学年1学級募集。

令和元年（2019年）10月創立70周年記念式典挙行。

令和3年（2021年）2月「伊高むらおこし会社」設立。

同年4月「伊高むらおこし会社」本格スタート「いわて留学（県外募集）」開始（入学者ゼロ）。

同年9月新校舎落成。



（2）校訓・教育目標

校訓 「明朗・創造・努力」

教育目標

ア 知・徳・体の三位一体の教育により、文化の推進者としての資質を育成する

イ 暖かく魂の触れ合う教育により、愛校心・郷土愛・愛国心を養う

ウ 人間の尊厳を重んじ、自他共に尊重する精神を育て、自彊不息の校風を培う

（3）生徒数等（令和5年5月1日現在）（人）

学 年	生徒数（内いわて留学）
1 学年	23（2）
2 学年	23（1）
3 学年	15（0）
合 計	61（3）

（4）部活動等

野球部、卓球（男女）部、バレーボール（男女）部、弓道部、美術部、吹奏楽部

郷土芸能委員会

地域子ども読書会（児童への読み聞かせ活動、令和5年度文部科学大臣表彰授賞）

（5）進路状況

令和5年度卒業生15人

	進路先	人数
進学	国公立大学	3
	私立大学	2
	私立短大	1
	専門学校	6
就職	公務員	1
	民間	2

3 九戸村の概要

北上山系の最北端、岩手県の北部に位置する九戸村は、人口約5,500人、面積は134平方キロ、面積の70%以上が山林原野で占められ、岩手県立自然公園折爪岳を抱えた、季節の移り変わりの美しい自然豊かなふるさとです。

かつて戦国時代最後の戦いとして豊臣秀吉と戦った戦国の英傑、九戸政実公ゆかりの九戸神社や首塚などの史跡も数多く残されています。

ナイター設備のある村営くのへスキー場は、ファミリースキー場として、近隣市町村はもとより県外（主に八戸市）からも多くのスキーヤーが訪れ、にぎわいを見せております。

キャッチフレーズ：花と緑が織りなす安らぎの里

位置：東経：141° 22' ～ 141° 30'

北緯：40° 6' ～ 40° 17'

人口※：5,238人（令和6年1月1日現在）

※筆者修正（広報くのへvol.791より）

面積：134.02平方キロメートル

（以上、九戸村HP<https://www.vill.kunohe.iwate.jp/docs/02.html>より引用）

小学校：5校（児童数211人）

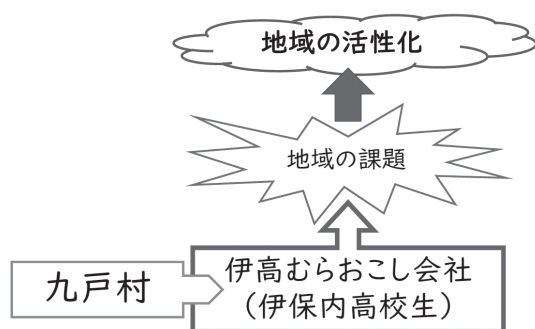
中学校：1校（生徒数118人）

※例年6割以上の生徒が村外へ進学
高等学校：1校（本校61人）

※児童生徒数は令和5年5月1日現在

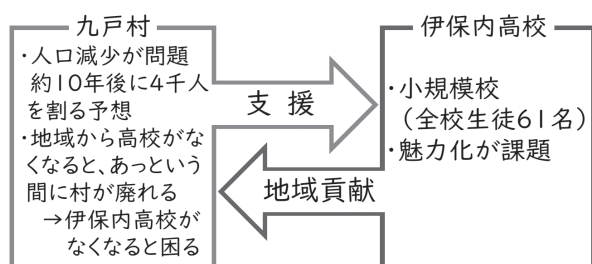
特産品：鶏肉（出荷数全国3位の岩手県内1位）、甘茶（生産量日本一）、木炭

工芸品：南部箆



日本全国の多くの自治体同様、人口減少が問題となっている。約10年後、人口が4千人を割ると予想されている。村に高等学校が無くなり、若者がいなくなると減少がさらに加速すると考えており、本校の存続が村の命運を握っていると考えている。そのため、本校に対して手厚い支援を行っている。

支援として、生徒に対して入学時制服代全額補助、通学費用助成、希望者に給食を無償提供、学校に対して進路指導費用補助、無料公営塾の運営、教育活動への人的支援等があげられる。



4 取組概要

本校は令和3年2月、学校所在地である岩手県九戸村と連携し、「地域の課題に向き合い、地域の活性化を図る」ことを目的として、本校の生徒を社員とする「伊高むらおこし会社」を設立した。

令和3年4月、伊高むらおこし会社の活動を教育課程の「総合的な探究の時間」に位置付けて本格的に事業を展開。会社経営を通して探究活動をしながら起業家精神やビジネスのノウハウを養っている。令和5年度で3年目を迎えた。

活動内容としては、外部専門家からアドバイスを受けながら九戸村職員等の指導やサポート

のもと、商品やサービスなどを企画、運営し、地域の課題を解決すること。具体的には、地元の特産品を活用した商品開発、九戸村の魅力を発信する手立てを講じることなどである。

生徒は意欲的に活動し、経験を積むことで資質・能力の育成が図られている。

村内外からの注目度も高く、好意的に応援してくれている。この特徴的な活動に魅力を感じ、志望理由の一つとして志願する入学生も徐々に増えている。



令和5年9月20日岩手日報

5 「伊高むらおこし会社」の設立について

(1) 設立までの経緯

本校は、かねてから総合的な探究の時間に取り組む上で九戸村に対して、村職員の支援や協力を要望していた。1時間程度の講話等の単発的な協力は得られていたが、長期にわたって継続した支援や協力を得られなかった。令和2年4月の村長交代に伴い、再度要望したところ、株式会社設立の提案を受ける。

思いがけない提案に、当初は総合的な探究の時間と切り離し、先進的な取組をしている全国の高校を参考にしながら、実際に登記をして事業展開する、という壮大な計画を立てていた。しかし、普通科の高校であることから、身の丈

に合った事業をすることに軌道修正し、最終的には株式会社を模倣した任意団体を村が起ち上げ、高校生が参加する、という形に落ち着いた。経営陣には高校生による「高校生役員」を置き、活動の主体は高校生で、専門家や村の（若手）職員のアドバイス、協力や指導を受けながら運営する形とした。

資本金50万円は全額村が出資。

当初の計画通り総合的な探究の時間に位置付けることとした。

（２）会社設立の目的

総合的な探究の時間に位置付けることとはしながらも、九戸村との関係も重視して、次の二つの目的を設定した。

ア 高校生がビジネスプランを自ら企画し実践する体験を通じて、社会への参加意識や対応力を身に付け、将来の進路を具体的に考える契機とする。

イ 高校生が地域の課題に向き合い、様々な取り組みを展開することにより、大人も巻き込

令和5年度「伊高むらおこし会社」年間計画

テーマ				1 商品開発		2 ゲーム制作		3 ドローン		4 イベント企画運営	
月	日	曜日	時限		会 進		会 進		会 進		会 進
4	10	月	5	キャリアパスポート記入	1	キャリアパスポート記入	1	キャリアパスポート記入	1	キャリアパスポート記入	1
	11	火	6・7	オリエンテーション	2	オリエンテーション	2	オリエンテーション	2	オリエンテーション	2
	18	火	6・7		2		2		2		2
				スタディサブリ講習会	1	スタディサブリ講習会	1	スタディサブリ講習会	1	スタディサブリ講習会	1
5	25	火	6・7	村を知る/業者を知る	2	技術講習	2	技術講習(座学)	2	記録係 企画立案	2
	2	火	6・7		2		2		2	動画編集	2
	9	火	6・7		2		2		2	ラインスタンプ制作	2
	16	火	6・7	商品案検討	2		2		2	ボランティア参加	2
6	23	火	6・7		2		2		2		2
	30	火	6・7	業者へ提案	2		2		2		2
	6	火	6・7		2	ゲーム制作	2		2		2
	20	火	6・7	試作品検討	2		2	技術講習(実技)	2		2
7	27	火	6		1		1		1		1
				卒業生と語る会	1	卒業生と語る会	1	卒業生と語る会	1	卒業生と語る会	1
	11	火	6・7		2		2		2		2
	18	火	6・7		2		2		2		2
夏季休業											
8	22	火	6	パッケージ・ポップ等	1		1	撮影実技	1		1
	29	火	6・7		2		2		2		2
	5	火	6・7		2		2		2		2
	19	火	6・7		2		2		2		2
9	26	火	6	販売・伊高祭準備	1	まとめ発表?	1	試写会・まとめ	1	オドデフェスタ&かみまちまつり	1
	30	土		イオン等での販売							
	3	火	6・7	販売報告会・伊高祭準備	2		2		2		2
	7	土		伊高祭での販売・お披露目							
10	10	火	6・7	グループ内まとめ	2		2		2		2
	17	火	6・7	商品開発決算報告	2		2		2		2
				地元企業見学事前指導	1	地元企業見学事前指導	1	地元企業見学事前指導	1	地元企業見学事前指導	1
	24	火	6・7		2		2		2		2
11				しごとメッセ	3	しごとメッセ	3	しごとメッセ	3	しごとメッセ	3
	31	火	6・7		2		2		2		2
				地元企業見学	6	地元企業見学	6	地元企業見学	6	地元企業見学	6
	7	火	学年毎	会社まとめ(発表準備)	2	会社まとめ(発表準備)	2	会社まとめ(発表準備)	2	会社まとめ(発表準備)	2
12	28	火	学年毎	会社まとめ(発表準備)	2	会社まとめ(発表準備)	2	会社まとめ(発表準備)	2	会社まとめ(発表準備)	2
	5	火	6・7	校内発表	2	校内発表	2	校内発表	2	校内発表	2
	12	火	6・7		2		2		2		2
	19	火	6・7	ナインズミーティング?	2	ナインズミーティング?	2	ナインズミーティング?	2	ナインズミーティング?	2
				新社会人ガイダンス	2	新社会人ガイダンス	2	新社会人ガイダンス	2	新社会人ガイダンス	2
					53 15		53 15		53 15		53 15

んで過疎化が進む九戸村の活性化につなげる。

6 「伊高むらおこし会社」の取組

令和5年度当初の指導計画を前ページに示した。なお、進捗状況等によって適宜計画を修正しながら展開した。

位置付けは前述のとおり総合的な探究の時間で事業展開している。

単位数は令和3年～令和4年、各学年1単位。令和5年から各学年2単位で実施。3年間の修得単位数は、令和5年度の3年生、2年生、1年生はそれぞれ4単位、5単位、6単位である。

取組は全校生徒から希望を取り、希望が多い場合は学年が偏らないように配慮していくつかの班に分け、班ごとに取り組む。年々、事業がレベルアップするよう、経験豊富な先輩からノウハウを学ぶこととする。

取組の成果は校内で発表会を実施し、代表が村内のいくつかの小学校と九戸中学校で発表する。

(1) 年度ごとの取組内容

取組内容	R3	R4	R5
商品開発	○	○	○
魅力発信		○	○
ドローン活用			○
広報・イベント企画			○

上の表のとおり、年度によって取り組んだ内容は異なる。取組を開始した令和3年度は手探りの状態で、商品開発だけであった。年度を追うごとに生徒たちは新たな課題を見だし、その解決のための新しい事業を生みだした。年々、活動の充実を図っていると言える。

以下、年度ごとの活動について振り返る。

令和3年度

商品開発・販売

初年度であったため、協力を買って出る地域の企業が多かったことと、全校生徒が商品開発に取り組んだため、多くの商品を作ることができた。

九戸村の特産品である甘茶、鶏肉、木炭等を

原材料として用いたお菓子やサンドウィッチ、消臭剤などを開発した。また、工芸品の南部箒の良さを発信するために、ささらや小さな箒などを開発した。

それらの商品を盛岡市内のスーパーマーケットとデパート（9月）、村内商業施設（9、10月）で販売した。令和4、5年度においても、販売については新たな施設を発掘し、規模を大きくしながら販売を継続している。

以下に令和3年度に開発した商品を示す。

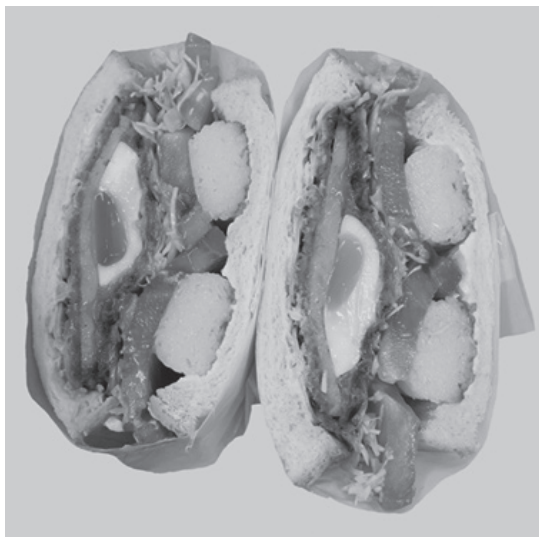


甘茶ティラミス

この商品は、九戸村特産の甘茶を原材料としたもので、伊高むらおこし会社が開発した商品の中で最高傑作である。実際に村内の菓子店で現在も販売が継続されている唯一の商品である。他の商品は残念ながら販売中止絶版となったか、注文を受けての生産となっている。



リーフパイ「葉°九っ戸」



九戸萌え断サンド



消臭剤「炭っこ」



一寸ささら、一寸ほうき

この一寸ささら、一寸ほうきの元となったものは九戸村の工芸品・南部箒である。南部箒の材料はハウキモロコシという植物で、九戸村の

気候条件のもとで育ったハウキモロコシには、先端に強い縮れが現れる、という特徴がある。この縮れがチリをよく掃き出すと言われている。

南部箒は材料が希少であり、全て手作業で作られるため大量生産できず、とても高額である。部屋の掃除用の小箒（下の写真）で22,000円、最高級品は100万円である。

流通量が微少であるため、多くの人はその存在すら知らない。この箒の良さや特徴を発信するために手頃な商品を開発したのである。



小箒（長さ80cm、幅25cm）

※製造販売元の高倉工芸のWebページ参照
(<https://nanbuhouki.jp/>)

商品の販売は前述のとおり9月から10月にかけて複数の商業施設で実施した。

慣れない生徒たちであったが、次第に慣れてきて、どのようにすれば多くのお客さんに商品を手にとってもらえるか、試行錯誤しながら行った。





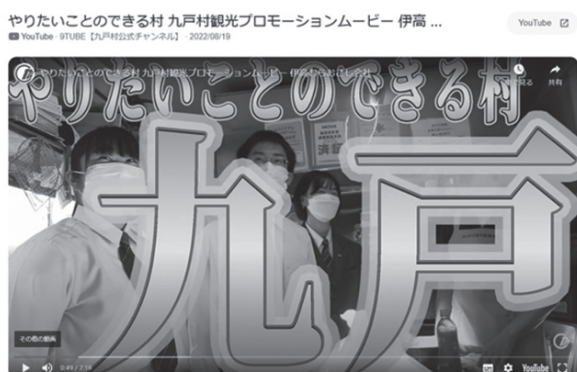
令和4年度

- (1) 商品開発・販売
- (2) 九戸村の魅力発信

新たに九戸村の魅力を発信する事業を起ち上げ、次の二つの方法で九戸村と本校の魅力を発信した。

ア プロモーション動画を作成し、YouTubeで配信

動画編集の技術のみならず、構想を考えると、撮影の段取りや手配など、九戸村に手伝ってもらいながら実施した。



動画のサムネイル（他にも多数あり）

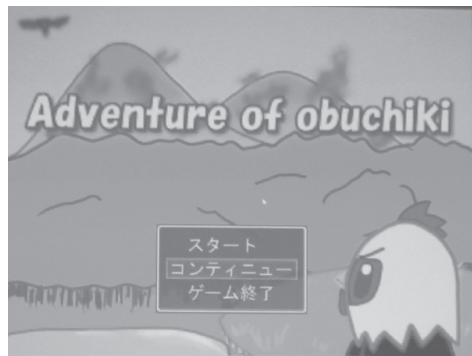
動画は、「youtube 伊高むらおこし会社」と検索するか、右のQRコードを読み取れば視聴できます。



イ 九戸村非公認マスコットキャラクターを主人公にしたゲーム作成

九戸村の非公認マスコットキャラクター「キングオブチキン」が冒険するゲームを作成した。

主に村内の児童を対象として文化祭や村の教育委員会主催で体験会を開催。



ゲームのオープニング画面

令和5年度

- (1) 商品開発・販売
- (2) 九戸村の魅力発信
- (3) ドローン活用
- (4) 広報・イベント企画

「九戸村の魅力発信」はゲームのみの展開として、新たに「ドローン活用」と「広報・イベント企画」を加えて展開した。

(2) 九戸村の魅力発信、(3) ドローン活用について

令和4年度の「九戸村の魅力発信」で取り組んだプロモーション動画については、クオリティを向上させるためにドローンを用いて撮影することを想定し、ドローン操作の技術習得のための「ドローン活用」を起ち上げた。ドローンの操作技術を習得した後に、プロモーション動画を復活する予定である。

技術習得と併せて、前年度のゲームと同様、文化祭や村の教育委員会主催で体験会を開催した。

(4) 広報・イベント企画

九戸村にある道の駅おりつめ内の産直施設「オドデ館」と協働し、「オドデフェスタ」を企画・実施した。開発した商品の販売、本校郷土芸能委員会が「江刺家神楽」の演舞を披露し、伊高むらおこし会社の事業を紹介するとともに、九戸村と本校の魅力を発信した。

このオドデフェスタをテレビの番組で宣伝し、来場者数を伸ばすことができた。また、伊高むらおこし会社の取組を岩手県全域に認知してもらう一助にもなった。



テレビの取材時の一幕



産直施設オトデ館リニューアル1周年記念

オトデフェスタ

9月30日(土) 10:00-15:00

オトデ館でお買い物した方
先着500名様にプレゼント
「オトデ箸」(10時)

ステージイベント	
10:05-	長興寺小がかわいくてごめんね♪ 長興寺小学校全校生による合唱と学校紹介
10:35-	かぼちゃボウリング 巨大かぼちゃでピンを倒して商品をゲット
11:20-	二戸吹奏楽団演奏 難曲20名編で響く迫力のハーモニ
12:00-	かぼちゃ輪投げ 巨大かぼちゃを回って商品をゲットしよう
12:45-	フェザーライト 中学生によるギター演奏
13:15-	ピンゴ大会 商品はオトデ館の商品がズラリ!
13:40-	創作太鼓の会「座・宇漢米」 観衆が持つ鼓力の記太鼓演奏
14:10-	伊保内高校神楽 全国大会出場の時を披露
14:40-	もちまき大作戦 九戸史上最多1200個のもちまき! 無料リフレシ付き

伊高むらおこし
会社新商品
販売会

ベリーフロマージュ

アップルブリュレ

グリーンソース

甘茶大福

発表会について

校内での発表の後、代表が九戸中学校と小学校で発表した。

児童は、教員ではなく年の近い高校生のお兄さんおやお姉さんから教えてもらうことで、自分事として興味を持つことができた。また、本校生徒にとっても、再度発表資料を再度見直し、児童にもわかりやすく説明するために試行錯誤することによって、振り返りとなり、新たな気づきに繋がる機会でもあった。



7 成果と課題

(1) 成果

ア 生徒の主体性が育まれつつある。

商品開発、ゲーム制作、動画作成等の活動を通して、最終的に成果物を完成させることができたことが自信となり、何事にも主体的に取り組む生徒が増えている。苦勞して何かを作り上げること、そして高評価を得ることで、壁を越えよう、新たなチャレンジをしよう、と思う生徒が増えている。

イ 地域貢献ができています。

そもそも、目的の根底には地元九戸村への貢献があり、それが達成できている。また、各方面から高評価を得ており、九戸村の宣伝にもなっている。注目されることによって、地元の活性化に繋がっている。

地域活性化成功の秘訣は、いい意味での「よそ者」「若者」「バカ者」、これらの三者をどう活かすかが鍵、と言われています。本校には他県から入学した「よそ者」、青春を謳歌している「若者」、そして豊かな発想力と行動力を持った「バカ者」がいます。今までの本校の生徒はどちらかというと、誰かが決めたことに従う者が大半で、うまく活かしていませんでしたが、今後が楽しみです。

ウ 伊保内高校の魅力の一つとなり、PRの一助となっている。

伊高むらおこし会社の活動をするのが入学を希望した理由の一つだとする生徒も徐々に増えている。今後更に増えて入学者を安定的に確保できることを期待している。また、進学や就職の面接等でこの活動の成果を発表し、進路目標実現に活かした卒業生も少なからずいる。やはり、主体的に活動し、自分のことばでアピールすることは、説得力が増して相手の心を揺さぶるのであろう。

(2) 課題

ア「探究活動」と言える内容に達していない。

「伊高むらおこし会社」の教育課程での位置付けは総合的な探究の時間での学びである。始まったばかりなので仕方のない部分もあるが、生徒が問いを立て、主体的に探究する活動としなければならない。

学習指導要領では探究における生徒の学習の姿を次のように定められている。

- ・日常生活や社会に目を向け、生徒が自ら課題を設定する。
- ・探究の過程を経由する。

①課題の設定

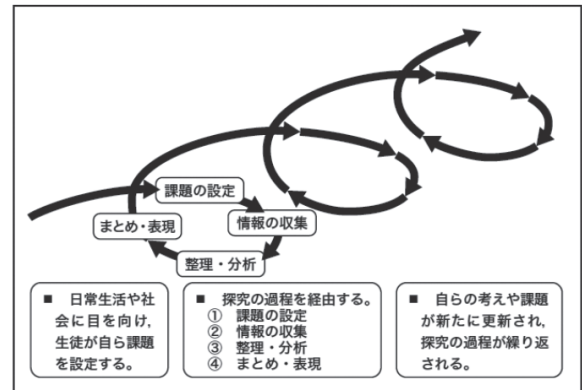
②情報の収集

③整理・分析

④まとめ・表現

- ・自らの考えや課題が新たに更新され、探究の過程が繰り返される。

探究における生徒の学習の姿



引用：学習指導要領

現在は、村が設定した課題を解決している状況である。生徒が課題を設定し、それを解決する、本来あるべき姿にすることが必要である。
イ 教員も「探究の過程」について、理解する必要がある。

恥ずかしい話ではあるが、活動が始まった当初、本校教員は総合的な探究の時間がどういふものなのかわからず、渡りに船とばかりに、村の担当者に頼り切っていたと言っても過言ではなかった。最近は探究の過程を意識して活動しようとする気運が高まってきているので、軌道修正が図られるであろう。

教員の声がけによって探究が深まりそうな場面は頻繁にあり、例えば、商品の販売会終了後、ある生徒が次のような感想を述べたことがあったという。要約すると、

- ・スーパーケットでお客さんから「高い」と言われた商品でも、デパートでは何も言われなかった。
 - ・同じ商品でも客層によって、売上げが変わる。
- 教員の声がけ一つで、この気づきを新たな課題として探究につなげることもできたかもしれない。

そのためには、教員や村の担当者が探究の四

つの過程を理解し、指導の充実を図らなければならない。特に探究の過程の一つである「整理・分析」の方法を学ばなければならない。例えば質問紙調査を行う場合、目的に合った質問であるかどうかの確認が必要である。また、「分析」を行う上で、数値では表すことができない場合の評価、分析の方法等を理解しておくべきであろう。大学の教員等、専門家の評価を元にまとめを行うことも考えられるので、絶えず、村以外のパートナーを探す必要もあるだろう。

ウ 地域貢献の在り方を模索する必要がある。

本校でよく議論されることとして、本校の「地域貢献」の対象である「地域」は、どこなのか？という問題がある。確かに、本校には近隣の市、町から通学している生徒や、県外出身の生徒もいる。学校がある九戸村だけを対象の「地域」とはできないのではないかと、いうのももつともである。

そこで私は、「最終的に『地域』はどこでもいい。九戸村に住みながら、発展途上国に貢献してもよいのだ。高校生の間は主に九戸村をステージにして、将来自分が思う地域に対する貢献の仕方、繋がり方を学ぶのだ」と述べている。中学校での説明会でもそう発信している。この考えは関係者から好意的に捉えられているが、九戸村も交えて、議論する必要がある。

エ 今後の見通しに不安がある。

この活動は九戸村長が会長である伊保内高等学校教育振興会という団体の事業として行われている。村長交代のタイミングで支援・協力を要望したことをきっかけとして立ち上がった組織である。この活動をどのような観点で振り返り、成果をどのように評価するのか、村との協議が必要である。成果が上がらない、と判断されればあっさりと打ち切られるかもしれないし、そもそも、成果はどのような指標で判断されるのか。様々な不安はつきまとっている。短期的な目標も必要だが、中長期的な見通しを持って、持続可能な活動としていかなければならない。もちろん、この活動が生徒にとって教育的価値

の保障された活動となっているか、客観的な評価も必要である。

8 おわりに

本校は、ありがたいことに最近多方面から注目されています。

代表的な活動は、本稿の主題である「伊高むらおこし会社」、他にも2回の全国高総文祭出場を誇る郷土芸能「江刺家神楽」伝承活動、今年度45回目で文部科学大臣表彰受彰の「地域こども読書会」等々、伊保内高校の魅力として多方面にアピールできるものである。

また、本校の生徒が主役を務め、多くの生徒、教職員が出演している九戸村自主製作映画「青春ドデン」も、なぜか本校が映画製作していると勘違いされ、各方面からお褒めのことばをかけていただいた。※上映は終了しました。



映画のポスター

映画は打ち上げ花火的なものでよいかもしれないが、他の活動は教育価値を高め、末永く継続していきたいものである。特に、始まったばかりの伊高むらおこし会社についてはこれからが肝心である。校長や村長が替わっても、充実した活動を継続できるように、枠組みを適切に構築していきたい。